

火星

平成二十三年五月号



七曜抄
(七)

山尾玉藻

紙風船打つ掌をひらきけり

菜の花を下りて莖を仕掛けけり

茄子苗の箱にしづまる峡の空

ピノキオの木の鼻おもふ春の風邪

青年が地下足袋をぬぐ夕桜

夕ざくら散りこむ坂本マムシ店

花棕櫚のあたりの夜闇定まらず

皂莢の木に雨の降る立夏かな

形代のみなゆたかなる袂かな

梅雨の蝶愛染葛さかのぼる

太白星

柳生千枝子

一条の光射しをり朝寝して
弾み鳴る春雷カルテ好転す
蜺汁昼も灯ともる螢光灯
春の蠅豆腐屋空を仰ぎをり
春落暉コーヒー冷めてしまひけり
草萌ゆる道迷ひゐて愉しめり
草青む行きゆきてなほ見えぬ明日

杉浦典子

鬼は外やまひぬけせしこゑなりし
羽音の集まる空の冴返る

春雷や寝かせし櫂のやせてをり
坊主池の水抜かれある日永かな
紅梅へ権現谷の風の音
紅梅や井戸のポンプを水奔り
永き日の回転ドアをひとりづつ

浜口高子

新しき靴のつまづく探梅行
火にかざす蹠ま白き追儼鬼
くらがりに大黒さんの花菜漬
舟半分水漬きし余呉湖ぬるみけり
日永なる撒き餌に嘴の増える増える
夕朧をとこの拾ふみなし貝
恋猫のすみれの籠をとび越せり

火星作品

山尾玉藻選

暗がりは闇より怖し豆を打つ
明石戸栗末廣

旧正の羽をつくろふ大白鳥

枝ぶりは水の上にあり鳥交む

図書館へ抜け道のあり植木市

戒名をかんがへてゐる春炬燵

ぬかるみを鳥つつきゐる節分会
大和郡山城 孝子

さへづりもさへづれる樹も朝日浴ぶ

料峭や裸木にあるつつかひ棒

鳥去んで眼のくもる昆虫館

岸に立つ女の真顔よなぐもり

風花やむらさき色のキャベツ畠
八幡大山文子

巫の声なく笑ふ霜日和

よその子を抱きあげにけり節分会

紅梅や紙漉小屋に人の影
鶉に縄張りのあり梅の花
家ぢゆうを灯して昏き雛かな
まだ渦とならざる潮春の月
離陸機の音の降りくる古巣かな
遠足が降りし車中の日にほひ
花明りして鶏の眼の老いにけり
立春の部屋のどこやらきしみけり
立春の日を吹きさらす流れ橋
節分の襖のへこみ笑ひけり
日の暈へ視線ふたたび寒鴉
雪解けの大きな鼻をもち来たり
清拭や母の尿のあたたかし
早春のステンドグラス床に映ゆ
坂道の天へつながらる春の雪
たつぷりと濡れ若草も古草も
きさらぎの日のさしてゐる名札の樹

宝塚蘭定かず子

八幡坂口夫佐子

天谷翔子

選のあとに

山尾 玉藻

巫の声なく笑ふ霜日和 大山 文子

暗がりには闇より怖し豆を打つ 戸栗 末廣

闇からは僅かな光も感じられない。しかし、暗がりには眼を凝らせばぼんやりとでも様子が窺えて、何かが潜んでいるような思いにもなる。掲句、小さな子供を交えた豆まきであろうが、暗がりには本当に鬼が潜んでいるのではないかと恐れる純真な子供、ごころを伝えている。この思いは誰もが幼い頃に抱いたもので、読み手のノスタルジアをくすぐる一句とも言える。俳句は共通体験を抛りどころとする文芸である。

鳥去んで眼のくもる昆虫館 城 孝子

作者はさまざまな昆虫を飼育し展示する「昆虫館」を巡っていて、ふと眼がくもるのを覚えたという。と言っても、実際にものが見え辛くなったわけではなく、小さな昆虫たちに目を凝らし過ぎて少々疲れたのであろう。その感覚と「鳥帰る」の思いは偶然ではあっても、どこかで命あるものへの深い思いで繋がっている。必然的偶然が大きな詩の空間を生む。

この句の場合の「巫」はめかんなぎ、即ち巫女であろう。若い巫女たちが詰め所内でお喋りをしていて、何か吹き出すような可笑しい内容となったのだろう。それでも巫女という立場をわきまえ、声をこらえて笑っている様子である。静かな詰め所がほんのりと艶やかになった様子を、季語「霜日和」がほどよく伝えている。

家ちゆうを灯して昏き雛かな 蘭定かず子

雛の面輪はどこか愁いをたたえており、雪洞を灯すと却って寂しげな面差しとなるものである。偶々家中を煌々と灯していた作者だが、ふと目にした雛の昏さに少なからず驚きを覚えたのである。ポリユームのかかった切れ字かかである。

立春の日を吹きさらす流れ橋 坂口夫佐子

「流れ橋」は木津川にかかる日本一長い木橋で、増水するとワイヤーが自然に切れる仕組みとなっているのでこの名がある。幅も極めて狭い上に欄干もなく、全くの吹き曝しである。しかし掲句、単に風が吹き曝す様子に留まらずに「日を吹きさらす」と述べ、春とは言え名ばかりの寒々しい「流れ橋」の景をこの上なく表出している。(以下略)

恒星圈

波田美智子

二ン月や近よつて見る桜の木
水仙忌参道掃ける翁みて
春風のやうな家庭に招かれし
早春やりハビリ室のビバルデイー
麦踏の青きバンドナ遠くより

戸田春月

廣畑忠明

口数の少なき姉に梅ひらく
淡雪や尼寺の炷く香時計
朧かな餃子のやうな豚の耳
露のたう風呂敷と云ふすぐれもの
風呂敷のものばれてをり探梅行

水門に水影揺るる春浅し
競馬場見ゆる堤のつくしんぼ
里山に日の柔らかき田打かな
梅白き駅舎に待てる対向車
下萌や農夫は煙草くゆらす

野澤あき

深澤鱻

母の忌の降り積む雪の静かなる
寒梅の日の枝移る鳥の影
春泥を踏みつつ人におくれをり
ふるさとへハンドル握る春の泥
春灯すいのち明りでありしかな

旧正のお化けと遊ぶ今年かな
節分や備長炭のひとつ爆ぜ
青頸の艶のさみしき忘れ鴨
次郎覚め太郎を起こす春の雷
百年を生きし母の忌室の花

獅子座

山尾玉藻推薦

川端俊雄

白鳥の首のさびしき遠日向
春立ちにけり奉納の土俵入
塔尾に古漬を買ふ遅日かな
下校子の声に潜きし春の鳩

西村節子

白椿喪服の母の待ちぬたり
薄氷に羽毛吹かるる猪名野かな
永き日の振り売り声を置き行けり
芽柳をいろいろて六角堂にあり

田中文治

濤の絵の包みにとどく干若布
麦踏や没り日の中の影二つ
胸に受く兎褒めぬる春祭
越天楽雪解雫のはやみきし

藤田素子

紅梅や昔の声でささやかかる
煙草屋の奥に顔ある余寒かな
如月のひかりに失せしイヤリング
白梅や僧に身の上話あり

西畑敦子

囀に浮洲だんだんふくらみ来
ひらがなの散る香屏風囀れる
ジャグラーに人の集まる梅の山
さかしまに止まる鳥どちしだれ梅

天谷翔子

湾口に舳ひしめく春の雪
満天星の芽のくれなゐの夜明けかな
兄の掛けくれし巣箱のいびつなる
春立つや潮の香に湯をあふれしめ

福本郁子

荃立や間口の狭き表具店
斑雪野に鉄道ファンのシャッター音
島の端の小次郎の碑や冬たんぼ
前掛けのかたき結び目春立ちぬ